

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(59) 平成14年11月15日

江戸時代の国学(その1)

## 『荷田大人啓』(121/40)

荷田春満かだのあづままる(別表記「荷田東麻呂」、寛文9(1668)年～元文元(1736)年)は、賀茂真淵かものみぶち、本居宣長もとおりのりなが、平田篤胤ひらたあつたねとともに、国学の四大人と称されます。春満は、神職として由緒のある京伏見稻荷社の東羽倉家に生まれましたが、次男であったため、元禄13(1700)年に江戸に出て歌学や神道の教授を始め、次第に名を広め、門人を持つまでになりました。さらに、有職故実、書籍、古語などについて将軍の下問に対する回答など幕府の依頼に携わるようになりました。このような中で著されたのが『創学校啓』そうがっこうけい(当館所蔵『荷田大人啓』(題簽による資料名)、121/40)といわれています。

『創学校啓』は、春満が国学の学校の創建を幕府に願い出たもので、通説では、享保13(1728)年春満が60歳の時、江戸に下った養子ありまる在満をして、幕府の執事大島雲平おしまうんべいを通じて将軍吉宗に上願したとなっています。春満の死後、寛政10(1798)年になって、春満の家集『春葉集』の付録として初めて刊行されました。また、幕末の安政6(1859)年と慶応2(1866)年に復刻され、当館所蔵資料は後者です。本文は漢文で全7丁、それに復刻した平田鐵胤かねたね(寛政11(1799)～明治13(1880)年、平田篤胤の養子)の跋文が付いています。

『創学校啓』で主張されたことは、中世社会の中で仏教・儒教の下に埋没した日本の古代文化(万葉集、日本紀など)を掘り起こし、これを復活するためには国学の学校を建てる必要があるということでした。初めて「国学」という語が出てくることから、春満は国学の創始者として位置付けられてきました。これを平田篤胤が主唱したこともあって、『創学校啓』自体が平田派による偽作説が唱えられたこともあります。

しかし、その後、草稿に近いと考えられる、春満の門人山名靈淵やまなれいえんの筆にかかるいわゆる「靈淵本」が見つかり、『創学校啓』自体はまったくの偽作ではないと考えられています。ただし、靈淵本では「国学」という語はまったく用いられていません。例えば「国学校」は「倭学校」に、「国学」は「倭学」又は「古学」に、また、流布本にある「皇国」もすべて「皇倭」になっており、唯一「国家之学」が一致するのみという状況です。そこで、春満自身が主張したことは古学の復興であり、後世の平田篤胤が春満をして「国学の創始者」という歴史的な意義付けをしたと解されることがあります。

(参考文献)

(跋文)

(本文)

高坂正顕編『近世日本の人間尊重思想 下』  
(121/132)

平・阿部校注『近世神道論 前期国学』(日本思想体系 39)(121.08/100)

古川・石田編『近世の思想 1』(日本史講座 第4巻)(121.08/104)

三宅清『荷田春満の古典学』(121.1/128)

大久保正『江戸時代の国学』(日本歴史新書)  
(211.8/20)